平野秀吉が学んだ巻小学校と恩師萩原盤根（はぎわらいわね）・井上幹二郎（いのうえかんじろう）

槇田善衛

一．はじめに

私が平野秀吉を考えるときに常に心に浮かぶのは、彼が生涯にわたって学び続けた「生涯学習[1]の徒」であったことである。「生涯学習の徒」としての先達は、平野秀吉の母が幼少期に語り聞かせた郷土の偉人、大愚良寛に通じるところがあるように思える。平野秀吉に生涯学び続けることの大切さを教えたのは母と考えられるが、母だけではない。おそらく一八七二（明治五）年発布の「学制」に基づく、学校教育の所産であろう。「学校とは『一定の施設・設備と教職員を有し、子どもあるいは成人を対象として意図的で定型的かつ計画的な社会化を組織的に行う機関』と定義づけられるような社会的組織、集団を示す概念」とされている[2]。学校が近代化の名のもとに制度化されつつあった明治のはじめに、平野秀吉は小学校で初等教育を受け、生涯学び続けることの大切さを教わったのである。

本研究では、平野秀吉が学んだ小学校の名称、修学年限、学科目、教員名と在職期間、所在を明らかにすることで、平野秀吉の人格形成に影響を与えた少年期の人物を特定し、その経歴を明らかにしたいと考えている。また調査の過程で明らかになった平野秀吉自筆の履歴書の内容を検証するとともに、平野秀吉の経歴を通じて、明治十年代における小学校教育の変遷の一端を明らかにしたいと考えている。

二．巻小学校の名称・修業年限・学科目

『平野秀吉』によれば、「明治十二年六月五日、巻小学校に入学し、（略）。明治十九年の春、巻小学校の中等級高等級等の全科を七年間で卒業し、卒業後も一年間、巻小学校に勤務した」とある[3]。巻小学校は統廃合の後、現在、新潟市立巻南小学校となっている。巻小学校の『學校沿革誌』には次の記載が見られる[4]。

學校名称変更ニ関スル記事

一　明治六年十一月開校第六大學區新潟縣管内第二中李区第一番小學公立巻校ト命名ス

一　仝十二年四月第五中學区西蒲原郡壱小學區公立巻校ト改称ス

一　仝二十年七月新潟縣西蒲原郡尋常科巻小學校ト改称ス

一　仝二十五年八月新潟縣西蒲原郡町立巻尋常小學校ト改称ス

（略）

平野秀吉が学んだ小学校の正式名称は「第五中學区西蒲原郡壱小學

1　生涯学習は「生涯のあらゆる時点で、あらゆる場において、あらゆる教育資源を活用してなされる、自発的で自律的な学習行動」をいう〔岩永雅也『生涯学習論―現代社会と生涯学習―』放送大学教育振興会,2006,p.21〕。

2　岩永雅也『教育と社会』放送大学教育振興会,2011,p.96。

3　小泉孝『巻町双書第十七集　平野秀吉』巻町役場,1971,p.2（筆者罫引）。

4　二〇一七（平成二十九）年八月十八日（金）筆者確認（筆者罫線引）。

區公立巻校」となる。平野秀吉が修めた教育課程は「第一次教育令」〔一八七九（明治十二）年九月二十九日公布〕以前の、「学制」〔一八七二（明治五）年八月二日〕に従う。「学制」の第二十章には「学校ハ三等ニ区分ス大学中学小学ナリ」、第二十七章には「尋常小学ヲ分テ上下二等トス此二等ハ男女共必ス卒業スルヘキモノトス」、続けて「下等小学ハ六歳ヨリ九歳マテ上等小学ハ十歳ヨリ十三歳マテニ卒業セシムヲ法則トス」とあるため義務教育は六歳から十三歳までの八年間であった。その後「第一次教育令」〔一八七九（明治十二）年九月二十九日〕、「第二次教育令」〔一八八〇（明治十三）年十二月二十八日〕がそれぞれ公布され、修業年限が大きく変更された。巻小学校の『學校沿革誌』には次の記載が見られる[5]。

修業年限（略）ニ關スル記事

一　明治六年公立巻校創立当時、上等、下等各八級ニ分テ修業年限上等四ケ年下等四ケ年通シテ八ケ年トナス

一　明治十一年ニ至リ上等、下等ヲ各六級ニ分テ修業年限上等三ケ年下等三ケ年通シテ六ケ年トナス

一　全十五年学制ノ改正ト共ニ上等下等ノ別ヲ廃シ更ラニ初等、中等高等ノ別ヲ設ケ初等中等各六級ニ分テ高等科ヲ四級ニ分テ修業年限初等科参ケ年、中等科参ケ年、高等科弐ケ年通シテ八ケ年トナス

一　全二十年再ヒ學制改正ノ為メニ尋常科巻小學校ト改名シ一級ヨリ四級ニ至ル階段ヲ設ケ一ケ年一學級修業スルコトトシ修業年限通シテ四ケ年トナス

一　全二十五年學制改正ノタメニ町立巻尋常小學校ト改名シ學級制度ハ変更ヲナサズ一ケ年一学級修業スルコトトシ四級ニ分チ修業年限四ケ年元ノ如シ

（略）

平野秀吉は入学当初「上等、下等ヲ各六級ニ分テ修業年限上等三ケ年下等三ケ年通シテ六ケ年トナス」であったが、（明治十五年の改正に伴い）「初等、中等高等ノ別ヲ設ケ初等中等各六級ニ分テ高等科ヲ四級ニ分ケ修業年限初等科参ケ年、中等科参ケ年、高等科弐ケ年通シテ八ケ年トナス」に変更された制度下での卒業生と考えらえる。

また「学制」の第二十七条には「下等小学教科として、綴字、習字、単語、会話、読本、修身、書牘、文法、算術、養生法、地学大意、理学大意、体術、唱歌があげられ、上等小学教科として以上のほかに、史学大意、幾何学罫画大意、博物学大意、化学大意があげられているので、小学校の教科は十八教科」とあるが[6]、その後「第一次教育令」「第二次教育令」の公布に伴い、履修教科も大きく変更された。巻小学校の『學校沿革誌』には次の記載が見られる[7]。

學科目

一　明治六年一月学校創立ト共ニ教科目ヲ左ノ通リ定ム

下等科目　修身、読書、作文、習字、筆算、珠算

5　同4。

6　春原幸雄ら『教育の原理と制度』共同出版,1992,p.93。

7　同4。

上等科目　修身、読書、作文、習字、筆算、珠算、
図画、地理、歴史

一　明治十五年　月初等中等高等ノ別ヲ定メ教科目ヲ左ノ通リ改ム

初等科學科目

修身、読方、筆算、珠算、地理ノ五科目トス

但シ理科ハ初等第一級ニ至リテ授ク

中等科學科目

修身、読方、筆算、珠算、地理、歴史、博物、物理、農業、商業ノ十科目トス

但シ物理及ヒ歴史ハ中等第三級以上ニ授ク

高等科學科目

修身、読方、筆算、珠算、地理、博物、化学、生理、幾何、経済、図画、家事経済ノ十二科目トス

但シ珠算、地理ノ二科目ハ高等第四級ノミニ授ケ

博物、生理ノ二科目ハ仝第三級以上ニ授ケ

経済、図画、家事経済ノ三科目ハ二級以上ニ授ク

一　明治廿二年十一月改メテ左ノ九科目トナス

修身、読書、作文、習字、筆算、珠算、図画、唱歌、体操

（略）

平野秀吉は「中等級高等級等の全科」を修めて卒業している。平野は一八七九（明治十二）年六月から一八八二（明治十五）年までの間〔約三年間〕は、一八七三（明治六）年一月制定の教科目に従い、下等科目を修学したと考えられる。さらに、一八八二（明治十五）年から一八八六（明治十九）年三月二十六日までの間〔約四年間〕は、一八八二（明治十五）に改められた中等科学科目および高等科学科目を修学したと考えられる。

以上をまとめると、平野は「下等科目として修身、読書、作文、習字、筆算、珠算（以上六科目）を修め、中等科学科目として修身、読方、筆算、珠算、地理、歴史、博物、物理、農業、商業（以上十科目）を修め、さらに高等科学科目として修身、読方、筆算、珠算、地理、博物、化学、生理、幾何、経済、図画、家事経済（以上十二科目）を修め」て卒業したものと推察される。この頃は、和魂洋才に代表される人間像が重視され、欧米の科学技術の修得を急ぎつつも「和魂」の涵養が重要視されつつあった時代である。平野秀吉はこの時勢にあって学問で身を立てる道を選んだと考えらえる。

三．巻小学校時代の履歴書

『平野秀吉資料目録』によれば、「（資料名）平野秀吉履歴書、（所蔵者）巻南小学校」とある[8]。新潟市立巻南小学校に残された『職員履歴書綴　巻尋常高等小学校』には平野秀吉直筆の履歴書が綴られていた[9]。詳細は次のとおり。

履歴書

西蒲原郡巻村

平民

[8] 巻町郷土資料館『巻町郷土資料館資料目録No.6平野秀吉資料目録』巻町郷土資料館,1984,p.15。

[9] 同4。

平野秀吉
明治癸酉六年七月十六日

一　証書
明治十九年三月廿六日公立巻小學校ニ於テ小學全科卒業証ヲ受ク別紙第一号ノ如シ

一　學業
明治十二年六月五日公立巻小學校ニ入リ傍ラ全十三年六月ヨリ漢籍ヲ萩原貞井上幹二郎ニ歴史ヲ萩原貞高宮重継ニ受ク

一　職務

一　賞罰
明治十五年五月廿日新潟縣ヨリ褒賞ヲ附與セラル別紙第二号ノ如シ
明治十七年七月五日西蒲原郡役所ヨリ褒賞ヲ附與セラル別紙第三号ノ如シ

第壱号

新潟縣平民
常吉長男
平野秀吉
十二年十ケ月

第一号

右ハ新潟縣ニ於テ制定セル學期第八年ノ課程ヲ修メ考試咸完セルヲ以テ高等全科卒業ヲ證明スル者也
明治十九年三月廿六日

公立巻小學校　印

第二号

巻校生徒
平野秀吉

平素學術勉勵ニ付褒賞候叟
明治十五年五月廿日

新潟縣　印

第三号

巻校高等第四級
平野秀吉
十一年五月

一　作文的例讀篇　壱部
右者平素學術勉勵候段寄特之義ニ付茲ニ賞品ヲ附與ス
明治十七年七月五日

西蒲原郡役所　印

右之通リ相違無之候也
明治十九年六月十日

平野秀吉

履歴書から次の二点について疑問を抱いた。一つ目は平野秀吉の生

年月日、もう一つは学業についての記載である。

一つ目の疑問、生年月日についてであるが、履歴書には「明治癸酉六年七月十六日」とあるのに対し、『平野秀吉』には「明治六年（一八七三年）年六月五日」[10]とある。これについては、旧暦（太陰太陽暦）で示された生年月日を、新暦（太陽暦）にあらためたものを転記・掲載したためだと推察できる。

もう一つの疑問、学業の記載についてであるが、履歴書には「（明治）十三年六月ヨリ漢籍ヲ萩原貞井上幹二郎ニ歴史ヲ萩原貞髙宮重継ニ受ク」とある。これは既に筆者が「平野秀吉の巻小学校時代（恩師）について」で指摘しているように、「萩原貞（はぎわらみさお）ではなく、その二男萩原磐根[11]に教わり」とし、平野が巻小学校で萩原貞から教わっていないことを指摘した[12]。

ここでもう一度、平野秀吉直筆の履歴書を読み直してみることにした。履歴書には「巻小學校ニ入リ傍ラ」とあえて「傍ら」と表現している。「かたわら」とは「その一方では」「そのあいまに」の意味があり、文字どおり解釈すると「巻小学校に入り、そのあいまに」となる。すなわち「小学校に通学しているあいまに、漢籍を萩原貞と井上幹二郎から、歴史を萩原貞と髙宮重継から特別に授けてもらった」ということになる。萩原貞は一八七四（明治七）年十二月に巻小学校を退職しているため、正式な教員として平野に授業を授けることは難しい（表1、2）。萩原貞は「一八九二（明治二十五）年三月末日」まで旧巻村で生活を営み、その後、三男源太郎と五男巻五郎が暮らす東京に移り、「一八九三（明治二十六）年九月十一日に（略）倒れ、（略）九月三十日（略）七十二歳で生涯を閉じ」ている[13]。平野が小学校に修学していた頃、萩原貞は旧巻村で生活を営んでおり、萩原貞は私宅などに学舎を設け、漢籍や歴史を教授することも可能であったと推察できる。しかしこの頃は、すでに学校が整備され、平野の人格形成に影響を与えたのは学校の教員と考えるべきである。そこで平野が巻小学校で授業を受けた人物を再度検証することにした。

分析に用いた資料は巻小学校の『學校沿革誌』である。平野秀吉は一八七九（明治十二）年六月五日に入学、一八八六（明治十九）年三月二十六日に卒業しているため、この間（六年十月）を修学期間と定め、この間に在籍した教員等を表1および表2のとおりまとめた。この表から明らかになったことを次に示す。

平野秀吉に教授したと考えられる、校長・訓導を修学期間の長い順に列挙すると、次のとおりとなる。

萩原盤根（はぎわらいわね）[14]　（期間）六年十月、明治十二年　六月～十九年　三月
髙宮重継　（期間）二年十月、明治十五年　二月～十七年十一月
林ツネ　（期間）二年二月、明治十六年　九月～十八年　十月

10 前掲3,p.1。
11 磐根ではなく盤根が正しい。
12 槇田善衛「平野秀吉の偉業と会津八一について」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十六号』越佐文人研究会,2013,pp.56-57。
13 亀井功『新巻村史話』亀井功,2012,pp.194-195。
14 萩原盤根と齋藤盤根は同一人物。萩原盤根は「明治十四、五年ころ、峰岡藩士齋藤多仲の長女ことと結婚して、齋藤家へ婿入り」する。齋藤家は「多仲の先代も萩原家から入り婿があり」、萩原家と姻戚関係であったため、萩原家からの婿入りが容易に進んだと考えられる〔亀井功『新巻村史話』亀井功,2012,pp.192-193〕。

井上幹二郎[15]（期間）一年五月、明治十七年十一月～十九年　三月
（略）

平野秀吉に教授したと考えられる、授業生[16]を修学期間の長い順に列挙すると、次のとおりとなる。

齋藤万次郎　（期間）四年二月、明治十二年　六月～十四年　九月
　　明治十六年　三月～十八年　十月
南須原源治　（期間）三年七月、明治十五年　九月～十九年　三月[17]
平岡藤松　（期間）三年七月、明治十五年　九月～十九年　三月[18]
大庭千吉　（期間）三年五月、明治十二年　六月～十四年　九月
　　明治十六年　四月～十七年　二月
　　明治十七年十二月～十八年十一月
清水重太　（期間）三年〇月、明治十四年　一月～十六年十二月
（略）

平野秀吉の履歴書に見られるとおり、漢籍は井上幹二郎、歴史は高宮重継から授業を受けていることは明らかとなった（表1、2）。また萩原貞の二男、萩原盤根は平野秀吉の修学期間（六年十月）のすべての期間に在職していることが明らかとなった（表1、2）。平野秀吉は修学中の一八八五（明治十八）年八月から授業生として巻小学校に勤務している。平野が卒業するのは一八八六（明治十九）年三月二十六日であるため、卒業する半年前から授業生として働いていたことになる。平野が授業生に採用された時の校長は井上幹二郎であり、卒業時の校長もまた井上である。さらに平野秀吉は卒業後の一年一月の間、授業生として巻小学校に勤務するのだが、その間の校長は齋藤盤根[19]である。このように萩原盤根は、平野秀吉にとって恩師といえる存在であり、平野は卒業した二か月後の一八八六（明治十九）年六月十一日に、校長の齋藤盤根本人に、直筆の履歴書を提出することになる。平野秀吉は漢籍と歴史の授業を小学校の授業とは別の時間帯に、特別に授けてもらった萩原貞の名を、履歴書に書き入れたものと推察できる。

表1および表2を作成しながら気づいたことが三つある。一つ目は、訓導と授業生の給与に大きな差が生じていることである。一八七九（明治十二）年四月からの教員就任年月において訓導と授業生の俸給（月

15 幹次郎ではなく幹二郎が正しい。

16 授業生とは、「正規の教員ではな」く「正規の教員である訓導の指示に従って訓導の授業を助けるアシスタント」である〔宮川秀一『明治前期の小学教員―とくに補助員・授業生について』大手前女子大学論集19,1985,p.140〕。

17 一八七〇（明治三）年三月一日、巻村南須原貞徳の長男として出生。南須原貞元の養嗣子となる。巻小学校卒業後、高宮重継、井上幹二郎に学ぶ。明治二十年四月巻小学校授業生。全二十六年新潟尋常師範学校卒業と共に巻尋常小学校勤務。明治三十年町立巻高等小学校兼務。全三十二年同校々長。大正十三年依願退職。〔この間、尋常准教員巻講習所嘱託。巻実業補習学校長兼務。郡教育会幹事。明治四十年普通教育奨励規程により受賞。明治四十三年小学本科正教員（文部省）。大正二年勤続二十年祝賀謝恩会（同窓会員）。大正九年勲八等〕。大正十三年勤続三十年祝賀謝恩会（同窓会員）。退職後方面委員。昭和四年から八年間町会議員学務委員。昭和十六年から全二十年十二月まで第十四代巻町長として第二次大戦下の町政執行。一九四九（昭和二十四）年一月二十二日自宅に於て病歿。生前和歌をよくし南水と号した。夫人マサは角海浜村山添氏。〔栗原九十九『西蒲原郡志補追人物篇』市川吉五郎,1981,pp.201-202〕。

18 平岡藤松の詳細は「次男磐根と平岡藤松」にゆずる〔亀井功『新巻村史話』亀井功,2012,pp.191-192〕。

19 同14。

俸）を比較すると、訓導は六円から二十円であるのに対し、授業生は五十銭から六円であり、俸給は一倍から四十倍と大幅な差が生じている。さらに校長の俸給（月俸）は十円以上であり、特に平野秀吉の履歴書に記載のみられた、高宮重継は月俸十九円、井上幹二郎は月俸二十円であり、他者に比べ破格の俸給であることが明らかとなった。二つ目は、教員に占める授業生の割合が高いことである。平野秀吉が修学した一八七九（明治十二）年六月五日から一八八六（明治十九）年三月二十六日の間に、四十九名の教員が在籍している（再任した場合も一教員としてカウントした）。その内訳は校長・訓導（訓導補含む）が七名、句読師が二名、授業生（授業生補助含む）四十名となる（表1の「修学期間」「教員貫籍」参照）。このことから、授業生（授業生補助含む）は全教員の八十二％を占めることが明らかとなった。これは何を意味しているのだろうか。平野秀吉の修学期間における小学生数の推移を表3にまとめると、（平野秀吉が入学する前年）一八七八（明治十一）年十二月の生徒は二〇六名であるのに対し、（平野秀吉が卒業する前年）一八八五（明治十八）年十二月は四〇三名となり、六年十月の間で小学生の数は一・九六倍に増加した。一八八三（明治十六）年十二月からの三年間が特段多く四〇〇名前後の生徒数となった。これは小学校が整備されるにつれて、入学生の数が増加し、この増員に対応するため、比較的給与が安価な授業生が大量に採用されたものと推察される。三つ目は、士族の割合が比較的多いことである。平野秀吉の修学期間（明治十二年六月五日から明治十九年三月二十六日までの間）中には四十九名の教員が在籍しているが、そのうち十六名が士族、三十三名が平民となり（表1）、全教員に対してそれぞれ三十三％、六十七％となる。このことから、士族が全教員の三割強を占めることが明らかとなった。また士族は、校長・訓導（訓導補含む）七名のうち六名を占め（表1）、校長・訓導全体の八十六％を占めた。さらに士族は、授業生（授業生補助）四十名のうち十名を占め（表1）、授業生全体の二十五％を占めた。このことから、士族は校長・訓導に多く、平民は授業生に多いことが明らかとなった。この結果から、明治十年代の小学校が士族の再就職先に選ばれていたといえる。

四．巻小学校時代の恩師萩原盤根

萩原盤根は長岡藩巻代官・郡代官、巻小学校初代校長、萩原貞の二男である[20]。萩原貞は「一八二二（文政五）年十二月三日、父萩原貞八（学問所徒取締や上組代官を勤める）と母千代の二男（実兄は早世）として長岡城下御弓町で誕生し、（略）一八九二（明治二十六）年九月三十日没」[21]しており、詳細な経歴は『萩原五楽先生略傳』[22]、「萩

[20] 萩原貞の「嫡配は山岸八郎兵衛の長女（略）お久」で、「子女は長女お辰松井策之進の妻、二女お千代徳増猪三郎の妻、長男萩原直枝、二男齋藤磐根、三男萩原源太郎、四男同正四郎、五男南須原巻五郎、六男萩原一六郎、三女某、四女お芳」の十名である〔福地源一郎『萩原五楽先生略傳』萩原源太郎,1893,p.14〕。三男萩原源太郎は東京商業会議所書記長となった人物で、子は萩原英一。英一は童謡「ピクニック」の作詞（訳詞）者でもある。英一は「一八八七（明治二十）年十一月三十日東京に於いて出生（略）東京音楽学校でピアノを学び一九一六（大正五）年母校の教授となり（略）一九五四（昭和二十九）年まで約三十年に亘って我国音楽指導の第一線で活躍した。（略）（同年）六月十六日休職、同月二十一日東京で病歿。正四位勲四等」〔栗原九十九『西蒲原郡志補追人物篇』市川吉五郎,1981,p.202〕。

[21] 前掲13,p.142。

[22] 福地源一郎『萩原五楽先生略傳』萩原源太郎,1893,72p。

原貞左衛門の経歴」[23]にゆずることにする。

さて、萩原盤根であるが、この人物の経歴等はこれまで明らかにされることがなかった。平野秀吉の履歴書を調査した際に、偶然にも萩原盤根こと齋藤盤根[24]直筆の履歴書を発見した。『職員履歴書綴巻尋常高等小学校』を手掛かりに次に萩原盤根の経歴を明らかにする[25]。

履歴書

新潟縣越後國西蒲原郡福木岡村
大字峰岡平民
當時仝縣仝郡巻町寄甾
齋藤盤根
安政二年一月廿三日生

證書

一　明治十二年三月一日新潟學校ニ於テ師範学校速成科卒業証書ヲ享ク別紙第一号ノ如シ
一　仝十九年三月十三日初等小学科教員免許状ヲ享ク別紙第五号ノ如シ
一　明治廿五年三月十八日初等科教員免許状有効延期証ヲ享ク別紙第九号ノ如シ

學業

一　萬延元年ヨリ慶應三年六月マテ實父萩原貞ヨリ三字経孝経四書五経小學古文唐詩選蒙求史記春秋左氏傳ノ素読及蒙求ノ講義ヲ受ケ傍ラ珠算ヲ学ブ
一　慶應三年七月ヨリ明治元年四月マテ長岡藩士安田正剛ヨリ論語ノ講義日本外史ノ質問ヲ受ケ仝藩士森廣之丞三間市之進（現正弘シ）松井策之進ヨリ兵學及佛式体操練兵砲術ヲ學ブ
一　明治元年十一月ヨリ十二月マテ仙臺ニ於テ長岡藩士萩原金五郎ヨリ筆算を傳習ス
一　明治二年三月ヨリ加茂町官立蒙養舎ニ入學シ鈴木文臺ニ就キ論語孟子ノ講義十八史略ノ輪講皇朝史略ノ質問及復文國語ヲ學ブ仝年九月廃校ニ付退學ス
一　明治二年十月ヨリ巻町館源右衛門ニ従ヒ國史略日本外史日本政記ヲ質問シ傍ラ國語ヲ学ブ
一　明治四年三月ヨリ峰岡藩立ノ入徳館ニ入リ新保正與ニ従ヒ史記日本政記及古事記日本書紀等ヲ質問シ文章軌範春秋左氏傳詩経ノ講義及復文作文ノ教授ヲ受ケ傍ラ撃剣ヲ修業ス
一　明治六年七月ヨリ仝八月四日マテ新潟學校ニ入リ教官英人「イドワルドゼームスモス」ニ就キスペル、リーダー物理萬國歴史萬國地理米國史及作文文法ノ教授ヲ受ケ教員長谷川松平髙橋等ノ諸氏ヨリ理化及数學ヲ學ブ
一　明治九年三月ヨリ仝十月マデ長岡中學校ニ入リ髙橋教官ヨリ代数幾何ヲ専修ス
一　明治九年十一月ヨリ仝十一年八月マテ執務ノ傍ラ文章軌範唐宋八家文元明史略清史略ヲ獨見シ博物生理ノ翻譯書ヲ研究ス

23　前掲13,pp.141-143。
24　同14。
25　同4。

一　明治十一年九月ヨリ新潟學校ニ入り仝十二年三月一日師範学速成科卒業ス

一　明治十二年四月ヨリ執務ノ傍ラ萩原源太郎ヨリ馬耳蘇氏記簿法ヲ傳習シ旧峰岡藩士伊藤道別ニ就キ國書和歌ヲ研修シ教育博物生理化学物理ノ翻訳書ヲ獨見ス

一　明治十八年一月ヨリ井上幹二郎ニ就キ八大家文及教育理科倫理ニ属スル翻訳書ヲ研究シ伊藤道別ニ就キ國書和歌ヲ研ク

職務

一　明治十年七月ヨリ仝十一年八月マテ巻校主宰兼務ス

一　明治十二年四月ヨリ巻校訓導補ニ嘱任セラル別紙第二号ノ如シ

一　明治十五年七月巻校七等訓導ニ任セラル別紙第三号ノ如シ

一　明治十六年八月巻校六等訓導ニ任セラル別紙第四号ノ如シ

一　明治十九年六月新潟縣公立巻小学校長ニ兼任セラル別紙第六号ノ如シ

一　明治廿年八月新潟縣尋常科巻小学校長ニ任セラル別紙第八号ノ如シ

賞罰

一　明治十九年十月新潟縣ヨリ賞状ヲ賜ハル別紙第七号ノ如シ

一　明治廿七年六月一日巻町教育費トシテ金五拾円寄附セシ賞トシテ木杯一個下賜セラル

第一号　　第四拾八号

新潟縣士族　　印　　萩原盤根

二十四年二ケ月

小學師範學速成科卒業候事

明治十二年三月一日

新潟學校

第二号　　萩原盤根

嘱任巻校訓導補

明治十二年四月十八日

新潟縣廳　印

第三号　　齋藤盤根

任　新潟縣巻校七等訓導

新潟縣大書記官正六位木梨精一郎　奉

明治十五年七月廿九日　印

第四号　　新潟縣巻校七等訓導　齋藤盤根

任　新潟縣巻校六等訓導

新潟縣大書記官正六位勲四等木梨精一郎　奉

明治十六年八月廿八日　印

第五号

新潟縣平民
第拾五号　齋藤盤根
三十一年二月

右ハ學力優等授業熟練品行端正ノ証跡
アルニヨリ試驗須キズ管内初等小學校教
員タルヲ免許スルモノナリ
明治十九年三月十三日
新潟縣　印

仝裏書
此免許状ノ効ヲ有スル年限満四ケ年トス

第六号

新潟縣公立巻小學校六等訓導
齋藤盤根

兼任　新潟縣公立巻小學校長
新潟縣大書記官従六位近藤幸止　奉
明治十九年六月十一日　印

第七号

公立巻小學校六等訓導
齋藤盤根

奉職以来夙夜懈ラス克ク生徒教導ノ方ヲ
得以テ今日ノ進捗ヲ致ス其功榮尠カラズ
依テ特ニ之ヲ賞ス
明治十九年十月十八日
新潟縣　印

第八号

新潟縣公立巻小學校六等訓導兼校長
齋藤盤根

任新潟縣尋常科巻小學校長
明治廿年八月三日　印

第九号

新潟平民
齋藤盤根
安政二年一月

右ハ明治二十五年三月十八日ヨリ満五年間初等
科教員免許状有効ヲ延期ス
明治二十五年三月十八日
新潟縣　印

第十号

新潟縣尋常科巻小學校長
齋藤盤根

任新潟縣西蒲原郡町立巻尋常小學校訓導兼學校長
明治廿五年八月廿九日　印

右之通リ相違無之候也

左

明治廿六年四月廿日　　齋藤盤根

追加

一　明治廿六年十二月十六日尋常小学校本科正教員免許状ヲ享ク別紙第十一号ノ如シ

一　明治廿六年十二月十六日新潟縣尋常師範学校ヨリ乙種講習証書ヲ享ク別紙第十二号ノ如シ

一　明治廿五年八月新潟縣西蒲原郡町立巻尋常小学校訓導兼学校長ニ任セラル

萩原盤根[26]は一八七九（明治十二）年三月一日に「新潟學校ニ於テ師範学校速成科卒業証書」を受けたことから、教育者としての人生がはじまったと考えられる。平野秀吉が一八七九（明治十二）年六月五日に入学していることを考えると、平野は盤根の第一期生といえる。萩原盤根の学業については、さまざまな人物から多種多様な教科・学科目を学んでいる。

萩原盤根が教えを受けた人物〔教科・学科目〕として、萩原貞〔長岡藩士〕〔三字経・孝経・四書五経・小學古文・唐詩選・蒙求・史記・春秋左氏傳の素読および蒙求の講義〕、安田正剛〔長岡藩士〕〔論語の講義、日本外史の質問〕、森廣之丞[27]・

26　同14。

27　森源三。一八三五～一九一〇。一八三五（天保六）年長岡藩士毛利家に出生。後同藩士森忠平治家を継ぐ。江戸へ出て幕府海防掛江川太郎左衛門に学ぶ。一八六八（慶応四）年戊辰戦争に従軍。一八七一（明治四）年小林虎三郎・三島億二郎らと触頭になる。長岡町第四区戸長。一八七二（明治五）年北海道開拓使十等出仕。一八七五（明治八）年札幌農学校副校長、長岡社社員。一八八一（明治十四）年第三代札幌農学校長（～明治二十二年）。一八八三（明治十六）年札幌農業事務所長兼務。一八八九（明治二十二）年亀田郡ほか三郡の郡長。一八九一（明治二十四）年官吏を引退。農場・木工所の経営、開墾事業を行う。一九〇二（明治三十五）年北海道初の衆議院議員。一九一〇（明治四十三）年六月四日死去。〔長岡市『ふるさと長岡の人びと』長岡市,1998,pp.60-61〕。肖像は「ふるさと長岡のあゆみ編集委員会『ふるさと長岡のあゆみ』長岡市役所,1986,p.147」にある。詳細は「古田島吉輝「北の大地で米百俵の精神を貫いた森源三」、長岡市郷土史研究会『長岡市郷土史第四十号』長岡市郷土史研究会,2003,pp.25-35」にゆずる。

三間市之進[28]・松井策之進[29]（ともに長岡藩士）〔兵学および佛式体操練兵砲術〕、萩原金五郎（長岡藩士）〔筆算〕、鈴木文臺[30]（蒙養舎）〔論語・孟子の講義、十八史略の輪講、皇朝史略の質問および復文・國語〕、館源右衛門[31]〔國史略・日本外史・日本政記の質問、國語〕、新保正與[32]（入徳館）〔史記・日本政記および古事記・日本書紀等の質問、文章軌範・春秋左氏傳・詩経の講義および復文・作文の教授〕、イドワルドゼームスモス（新潟學校英人教官）〔スペル・リーダー・物理・萬國歴史・萬國地理・米國史および作文文法の教授〕、長谷川・松平・髙橋（新潟學校）〔理化および数學〕、髙橋（長岡中學校教官）〔代数幾何〕、萩原源太郎[33]〔馬耳蘇氏記簿法の伝習〕、伊藤道別[34]（旧峰岡藩士）〔國書和歌〕、井上幹二郎〔八大家文および教育・理科・倫理の

28 一八三五～一八九七。長岡藩士。幼名は建蔵、後に市之進と改め、明治維新後は織部または一侗郎と称し、のちに正弘と改めた。藩校の教師であったが、洋学を志し、江戸に出て塩谷宕陰の塾で学んだ。一八六一（文久元）年江戸高輪の東禅寺における英人殺傷事件の嫌疑で一時捕らわれたが許されて帰国。藩の奉行格となって河井継之助を助け、北越戊辰戦争では軍事掛となって各地に転戦。一八六八（慶応四）年九月降伏後、藩の首謀者とされ、無期謹慎となったが、翌年許された。一八七四（明治七）年警視庁に出仕し、一八七七（明治十）年の西南戦争に従軍した。一八八一（明治十四）年初代東京憲兵本部隊長に任じられ、一八八八（明治二十一）年憲兵本部長となった。一八九三（明治二十六）年石川県知事となり、一八九六（明治二十九）年辞任した。〔長岡市『ふるさと長岡の人びと』長岡市,1998,p.66〕。肖像は「ふるさと長岡のあゆみ編集委員会『ふるさと長岡のあゆみ』長岡市役所,1986,p.147」にある。『誌録　明治元戊辰年一巻　稲垣平助重光手記（長岡藩家老）』によれば「佐幕ヲ主張シテ就中奸党タル」人物として「河井継之助、山本帯刀、牧野市右衛門、稲垣主税、花輪求馬、三間市之進、村松忠次右衛門」が挙げられ、「是等者最モ当今之重臣」として「萩原友之丞」の名がみえる。萩原友之丞は萩原貞のことであり、三間市之進とともに河井継之助派に属していたと推察できる〔小林安治「〈資料紹介〉『誌録』（一）長岡藩家老稲垣平助重光手記」、長岡郷土史研究会編集委員会『長岡郷土史　特集・戊辰戦争をめぐって（一）』長岡郷土史研究会,1979,pp.125-126〕。

29 萩原貞の「長女お辰松井策之進の妻」とあることから、松井策之進は萩原盤根の義兄にあたる〔福地源一郎『萩原五楽先生略傳』萩原源太郎,1893,p.14〕。肖像は「ふるさと長岡のあゆみ編集委員会『ふるさと長岡のあゆみ』長岡市役所,1986,p.147」にある。

30 鈴木文臺の詳細は「鈴木虎雄『鈴木文臺先生年譜略　附録私塾長善館沿革略』鈴木虎雄,1929,66p」にゆずる。

31 館源右衛門の詳細は「栗原九十九『西蒲原郡志補追人物篇』市川吉五郎,1981,pp.200-201」「亀井功『新巻村史話』亀井功,2012,pp.124-131」にゆずる。

32 新保正與の詳細は「新保正樹『追想　新保正與・磐次・寅次父子』新保博彦,2012,21p,529p」にゆずる。

33 同20。萩原源太郎は一九〇二（明治三十五）年五月横浜港出港、同十月三十日神戸港入港の、澁澤榮一らの欧米視察（一九六日間）に同行〔大嶽幸彦『地理学から見た「明治欧米見聞録集成」―澁澤榮一の場合―』上越教育大学研究紀要第23巻1号,2003,p.184〕。源太郎は知人福地源一郎に父貞の略伝『萩原五楽先生略傳』の執筆を依頼した〔福地源一郎『萩原五楽先生略傳』萩原源太郎,1893,72p〕。「実業家。多年、東京商業会議所書記長の重職につき東京市商工会の進展を促進（略）澁澤男爵の信任を博し、推薦されて東京瓦所（所でなく斯）株式会社に入るや其の庶務課長として時の重役福島甲子三を補佐し、能く千代田瓦斯株式会社と対抗し、のち同社を合併し」た。「西蒲原郡巻町の出身、夙に東京に出でて英語経済学等を研究し、一時東京高等商業学校の前身たる商法講習所に教鞭を採り（略）後に実業界に入り次で澁澤榮一の風艦する所となり、男の欧米視察に随行して見聞を弘め」た。「今や幾多の工業会社の株主又は重役として国産奨励、富力充実に力め尚京城電機株式会社監査役として令名あり」〔三神正僚『新潟縣人物誌』越後会,1918,pp.787-789〕。

34 三根山有終団蔵明治七年「通称名乗之内廃止届」による登禄氏名に士族・伊藤道別の名があり、「峰岡家中屋敷復元図」にも伊藤道別の名がある〔武田広昭『巻町双書第二十集　三根山藩』巻町役場,1973,p.30,47〕。

翻訳書〕、伊藤道別〔國書和歌〕を挙げることができる。萩原盤根は延べ十八名から五十の教科・学科目を学び[35]、初等中等教育を担う教員としてふさわしい人物になったと考えられる。なお、一八七四（明治七）年一月に萩原貞（五十三歳）の手紙「甲戌元日両兒に與ふ」に「南須原戸長[36]の厚庇を以て、新潟學校に」とあることから[37]、旧巻村民の教育に対する強い願いが萩原盤根に込められていたと考えてよい。

五．巻小学校時代の恩師井上幹二郎

井上幹二郎の名は平野秀吉や萩原盤根の履歴書にみられるだけでなく、南須原源治の人となりを示した文章にも記されている。まずは『巻町史』を手掛かりに井上幹二郎の人となりを示す[38]。

井上幹二郎（一八五七～一九二五）は長岡藩士族の家に生まれ、（略）三根山藩の士族であった叔父の井上由章の許に預けられ、明治三年藩校で新保正與に学んだ。同九年、官立新潟師範学校に入学したが程なく廃校（略）、引き継いだ新潟学校師範学科を十一年に卒業、魚沼郡内の小学校長兼訓導を経て十七年巻小学校長に赴任した。雄弁で文筆にすぐれ、郡長雨宮広厚の知遇を得て郡書記となり、教育事務を兼務し、西蒲原郡教育会を指導した。行政手腕をかわれ、二十八年から三十一年まで四か年間県学務課に属し、次いで中魚沼・岩船郡の郡長もつとめた（自叙伝「経歴」）。

調査中に、古田島吉輝氏より貴重な資料をいただいた。氏は『懐旧歳記』[39]の完本の一つである『長陵歳時記』を、井上幹二郎の子息井上正幹が長岡市立互尊文庫に寄贈したことを縁として[40]、井上正幹著「父、井上幹二郎の履歴」をまとめておられた[41]。詳細は表4のとおりである。表4によれば、井上幹二郎の経歴は「一八八六（明治十九）年三月に西蒲原郡書記に転任し教育事務」を担当した時点で終わっているが、井上の幼少期から青年期にかけての動静を知る上で貴重な資料といえる。

六．巻小学校の所在と変遷

平野秀吉の生家が特定される一方で[42]、平野が学んだ小学校は、明治はじめの学校教育制度改正に伴う混乱により変遷を重ねた。巻小学校の『學校沿革誌』の記載に従い、巻小学校の所在と変遷を明らかにしようと試みた。はじめに『學校沿革誌』の記載を次に示す[43]。

學校位置及校舎ニ関スル記事及其他

一　明治六年一月第三大区小二区三番組巻村第二八九番地ニ開校ス

35 複数回にわたって学んだ人物及び教科・学科目もそれぞれ数えあげた。
36 戸長（巻村）は南須原齋。
37 前掲13,pp.43-44。
38 巻町『巻町史　通史編　下巻』巻町,1994,p.54。
39 小川當知（善右衛門）が明治九年に最初に著した、城下の年中行事の記録〔長岡市立中央図書館文書資料室『長岡あーかいぶす　第9号』長岡市立中央図書館文書資料室,2010,p.3〕。
40 長岡市立中央図書館文書資料室『長岡市史双書四十四　長岡城之面影城下年中行事』長岡市立中央図書館文書資料室,2006,p.46。
41 二〇一七（平成二十九）年十二月二十二日日（金）筆者確認。
42 槇田善衛「平野秀吉の生家および墓の所在と遺墨について」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第二十号』越佐文人研究会,2017,pp.87-93。
43 同4。

（巻村字本町通リ二番町町會所東西拾間南北三間半ヲ以テ假校舎充ツ）

一　明治六年十月ニ至リ就學生漸々増加シ加フルニ教場ノ制法及ヒ管理上ノ不都合ヲ来タセシヲ以テ仝村戸長南須原齋氏宅ノ一部ヲ借リ受ケ校舎ニ充ツ

一　明治十一年四月仝氏宅地内ニ東西十四間南北七間半ノ校舎ヲ建築ス別紙図面第一号如シ

一　明治十六年四月ニ至リ就学生益々増加シ校舎狭隘ヲ告ゲ教育上不便ヲ感スルノ甚ダシキノ故ヲ以テ新タニ地ヲ仝村百六番地ニトシ東西五間南北十五間ノ校舎ヲ建設ス別紙図面第二号ノ如シ

一　明治十七年九月ニ至リ校舎ノ狭隘ヲ感ジ本舎ノ西ニ更ラニ東西三間半南北十二間ノ校舎ヲ増設ス即チ別紙図面第三号ノ如シ

一　明治廿年四月ニ至リ學制ノ変更ノ為メニ生徒著シク減員シ且ツ郡立高等小學校ノ設置アリシヲ以テ校舎ノ半部ヲ高等科西蒲原郡小學校ニ貸與ス此間校舎ノ南方ニ南北廿四間東西七間ノ体操場ヲ建設ス

（略）

平野秀吉が入学したのは一八七九（明治十二）年六月五日であり、卒業したのは一八八六（明治十九）年三月二十六日である。したがってこの間の小学校の校舎ならびに所在をまとめると次のとおりとなる（表5）。

一八七八（明治十一）年四月に巻村戸長南須原齋（いつき）氏の宅地内に、東西十四間南北七間半の校舎を建築する。（校舎は）図面第一号のとおり〔図面第一号（原図）をもとに作図し図1に示した〕。

一八八三（明治十六）年四月になり就学生がますます増加し、校舎が狭くなり教育する上で不便を強く感じるようになった。そのため新たな敷地として巻村百六番地に、東西五間南北十五間の校舎を建設する。（校舎は）図面第二号のとおり〔図面第二号（原図）をもとに作図し図2に示した〕。

一八八四（明治十七）年九月になり校舎が手狭に感じ、本舎の西に更らに東西三間半南北十二間の校舎を増設する。（校舎は）図面第三号のとおり〔図面第三号は作図していない〕。

以上のことから、一八七八（明治十一）年四月、平野秀吉（数え年）六歳（小学校入学一年前）時に、巻村戸長南須原齋氏の宅地内（図3）に新校舎が建設されたと考えてよい。この校舎の二十四坪の教室（図1）は西浦通りに面していたと考えられる。一八八三（明治十六）年四月、平野秀吉（数え年）十一歳（小学校入学四年後）時に（表5）、旧代官所屋敷（図3）に新校舎が建設されたと考えてよい。この校舎の生徒入口および玄関（図2）は西浦通りに面していたと考えられる。一八八四（明治十七）年九月、平野秀吉（数え年）十二歳（小学校入学五年後）時の増設は、二階建本家（図2）の西側に校舎を増設したものと考えられる。一八八七（明治二十）年四月、平野秀吉（数え年）十五歳で巻小学校の授業生を終えるまで旧代官所屋敷（図3）に校舎が建っていた。すなわち平野の修学期間中は、校舎の移築が一回、増築が一回あったことが明らかとなった。この要因は表3で示されたとおり、小学生数の増加によると考えられる。また図3からも明らかではあるが、平野秀吉の生家である平野兵吉宅と小学校の校舎は百五十

メートルと離れていない（図3）。平野秀吉は小学校のすぐそばで生活を営み、学問の大切さを胸に刻んだと考えられる。

七．結び

本研究では「生涯学習の徒」であった平野秀吉が在籍した一八七九（明治十二）年六月から一八八七（明治二十）年四月までの間における巻小学校に着目すると、次の八点が明らかとなる。

（一）平野秀吉が入学および卒業した小学校の正式名称は第五中學区西蒲原郡壱小學區公立巻校である。

（二）平野秀吉は一八七九（明治十二）年六月五日に小学校へ入学し、一八八六（明治十九）年三月二十六日に小学全科の卒業証を受けて卒業している。したがって、修業年限は六年十月である。

（三）平野秀吉は小学校で、下等科目として修身、読書、作文、習字、筆算、珠算（以上六科目）を修め、中等科学科目として修身、読方、筆算、珠算、地理、歴史、博物、物理、農業、商業（以上十科目）を修め、さらに高等科学科目として修身、読方、筆算、珠算、地理、博物、化学、生理、幾何、経済、図画、家事（以上十二科目）を修めたものと推察できる。

（四）平野秀吉に教授したと考えられる校長・訓導は、萩原盤根、髙宮重継、林ツネ、井上幹二郎。平野秀吉に教授したと考えられる授業生は、齋藤万次郎、南須原源治、平岡藤松、大庭千吉、清水重太。この九名は平野の修学期間（明治十二年六月五日から明治十九年三月二十六日までの間）と長期間重なり、平野秀吉の人間形成に影響を与えたものと推察できる。

（五）萩原盤根は巻小学校初代校長、萩原貞の二男であり、長岡藩および峰岡藩の関係者を含む延べ十八名、五十の教科・学科目を修め、小学校教員となる。新潟学校での修学も巻村戸長南須原齋の支援を受けて行われている。

（六）平野秀吉の修学期間中に在籍した教員のうち、士族の割合は三十三％。士族は校長・訓導（訓導補含む）全体の八十六％、授業生（授業生補助含む）全体の二十五％を占めた。士族は再就職先に小学校教員を選び、明治十年代の初等教育を支えたといえる。

（七）平野秀吉の修学期間中に、小学生の数は約二倍に増加し、必要な教員を確保するため授業生の大幅な採用が試みられた。その結果、全教員に占める授業生（授業生補助含む）の割合は八十二％となり、教員の給与の格差は訓導と授業生の間で最大四十倍に拡大した。また小学生の増加に備え、小学校の校舎の移築と増築が施された。

（八）平野秀吉が学んだ小学校は生家と百五十メートルと離れておらず、平野秀吉は学びに適した環境にあったといえる。

このように学校教育制度が整いつつある時代にあって、平野秀吉は恩師がそうであったように、「学び続ける教育者」としての生き方を見定めたものと私は考える。

一八六八（慶応四）年五月中旬から六月上旬にかけて、長岡藩巻・曽根両組に二万石騒動と呼ばれる、大きな農民一揆が起きている[44]。場所は旧巻町（新潟市西蒲区）を中核とする旧西蒲原郡一帯である。平野秀吉に影響を与えたと考える、萩原盤根と井上幹二郎はともに長岡藩士の家系である。この騒動の発端が長岡藩の悪政に起因するものだと考えれば、萩原、井上の両名が巻小学校に奉職していたこと自体、奇異な感もある。また両名は経歴に共通点が多い。両名はとも三根山藩に知遇があり、新保正與から教授を受けている。さらに新潟学校師範学科ならびに速成科を卒業し、旧巻村民に乞われて小学校の訓導および校長となり、村民に多大なる貢献をしている。

平野秀吉（齢六十二歳）は一九三四（明治九）年十月十七日に、高田師範学校同窓生による胸像除幕式が開催され、謝恩会の挨拶で次のように述べている[45]。

（略）十七歳餘にして西蒲原郡内の一小学學校長を拝命し二十二歳の時新潟中學校に奉職致しました。其の頃私の理想として胸中に抱いてゐました人は、郷土の碩學新保西水[46]先生でございます。仙臺の鴻儒大槻磐渓の高弟で、あの新保磐次さんや此の頃廣島高等學校長をよされた新保寅次さんのお父さんでございます。たしか明治二十六年、新潟師範學校に御在職のまま六十一歳で亡くなられた方でございます。當時私は、自分も此の先生の如く六十まで勤め通される様に勉強しよう、そして其の歳になつたらきつぱりと切上げようと、一生の豫定を立てて思ひ込んだものでございます（略）。

平野秀吉に影響を与えた、萩原盤根や井上幹二郎らの人々は、新保正與から教授を受け、師と仰ぎ、新潟県の近代教育者の理想的な人物として新保正與を位置づけたと推察される。このことが師範教育に生涯をささげ、「生涯学習の徒」としての在り方・生き方を探究し続けた、平野秀吉の人間形成を促し育んだものと私は考える。新保正與をはじまりとする新潟県新潟師範学校の教育の源流と、平野秀吉を師父とする新潟県高田師範学校の教育の源流が、旧巻町（新潟市西蒲区）を中核とする旧西蒲原郡の地で育まれたことは偶然の所産であろうか。

八．後記

本研究を行うにあたり、新潟市立巻南小学校より貴重な資料等をご提供いただいた。また長岡戦災資料館の古田島吉輝先生、長岡市立中央図書館文書資料室の田中洋史室長からご教示いただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

最後に平野秀吉が一八九二（明治二十五）年三月に提出した小学校教員学力検定試験願を紹介し、平野秀吉研究が一層進展することを願う[47]。

44 巻町『巻町史　通史編　上巻』巻町,1994,pp.822-824。

45 高田師範学校内同窓会『恩師平野先生謝恩記念誌』高田師範学校内同窓会,1935,pp.43-44（筆者罫線引）。

46 正與の別名。

47 巻町『巻町史　資料編5　近・現代（Ⅱ）』巻町,1990,p.297。

小学校教員学力検定試験願

新潟県西蒲原郡巻町大字巻第二百九拾七番戸住
平民平野兵吉長男
平野秀吉
明治六年六月生

倫理科、教育科、国語科、漢文科、数学科、簿記科、習字科
右自分儀小学校教員志願ニ付前記ノ七科学力検定試験相受度別紙履歴書相添此段相願候也

右
平野秀吉㊞

明治二十五年三月十二日

新潟県知事　籠手田安定殿

第四六号
前書族籍年齢等相違無之ニ付此段証明候也

新潟県西蒲原郡巻町
町長　南須原　定　之　印

明治二十五年三月十二日

（巻村役場文書　巻町立郷土資料館所蔵）

〈筆者・〒九五九―〇四一二　新潟市西蒲区桑山三一六〉

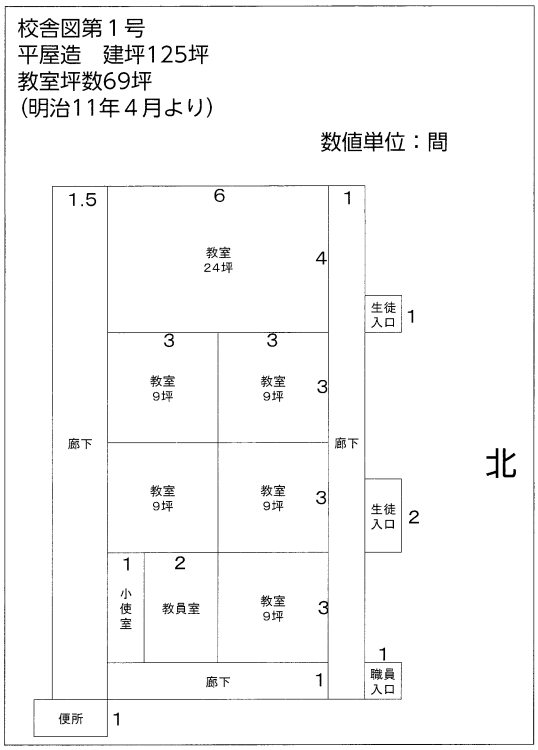

図１．図面第一号

引用文献　『學校沿革誌』巻尋常高等小学校。

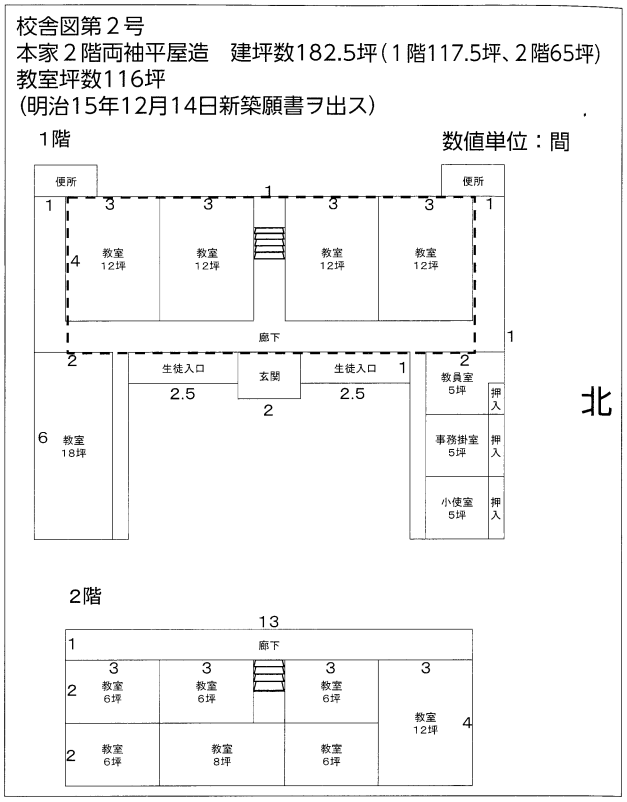

図２．図面第二号

引用文献　『學校沿革誌』巻尋常高等小学校。

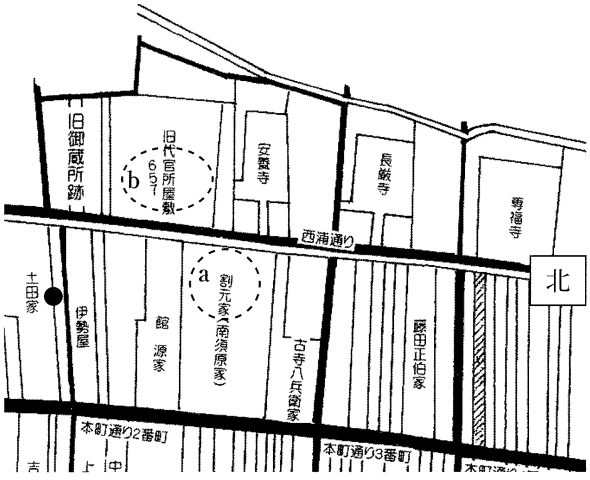

図３．明治二十年代の巻村本村図面（抜粋）

●は平野秀吉宅を示す。

点線は巻小学校の校舎跡地（推定）を示す。

(a：図１の図面第一号、b：図２の図面第二号)。

引用文献　亀井功『新巻村史話』亀井功,2012,p.253。

表１．平野秀吉の修学期間と在籍教員一覧

教員No.	教員名	修学期間〔1〕	教員の職名・資格	教員就任年月	教員退職年月	教員在職年数	教員の就任時俸給（月俸）	教員の退職時俸給（月俸）	教員貫籍	備　考
1	萩原貞	なし	教師	明治6年1月	明治7年12月	2年0月	3円	同左	本県士族、第3大区小1区3番組巻村寄留	
2	萩原直枝	なし	句読師	同上	明治10年6月	3年6月	4円	4円16銭	同上	明治7年12月教師に任ず
3	青木正賢	なし	句読師	同上	明治18年10月	11年10月	1円	5円	本県平民、第3大区小1区巻村住	明治8年2月授業生となる
4	堂谷復常	なし	句読師	明治8年2月	明治11年5月	3年3月	1円	5円	同上	
5	萩原巻五郎	なし	句読師	明治9年2月	明治12月4月	3年3月	1円	5円	本県士族、第3大区小1区巻村住	
6	南須原定治	0年5月	句読師	明治10年1月	明治12月10月	2年10月	1円	5円	本県平民、同上	定之と改名
7	久我肇	0年5月	句読師	明治10年1月	明治12月10月	2年10月	1円	5円	同上	
8	早川秀太郎	なし	授業生	明治10年1月	明治11月5月	1年5月	41銭6厘	同左	同上	
9	佐藤芳平	なし	授業生	明治10年1月	明治12月4月	2年4月	41銭6厘	同左	同上	
10	齋藤万次郎	2年4月	授業生	明治11年6月	明治14年9月	3年4月	1円	同左	本県士族、第20大区小9区村松住	
11	岡嶋健一郎	なし	授業生	明治10年9月	明治11月9月	1年1月	1円	同左	本県士族、第3大区小1区巻村住	
12	荒川衛士	1年5月	授業生補助	明治11年6月	明治13年10月	2年5月	1円	同左	本県士族、第3大区小4区弥彦村住	
13	鈴木武一	1年0月	授業生	明治11年6月	明治13年5月	2年0月	1円	同左	本県士族、峰岡村住	
14	工藤軍平	0年9月	授業生補助	明治11年6月	明治13年2月	1年9月	1円	同左	本県平民、第2大区小2区赤塚村住	
15	萩原盤根	6年10月	訓導補	明治12年4月	明治29年10月	17年7月	10円	12円	本県士族、巻村住	明治15年7月7等訓導、16年8月6等訓導、19年6月校長
16	本田正平	なし	授業生	明治10年9月	明治11年9月	1年1月	1円	同左	本県平民、第3大区小11区巻村住	
17	禪　月宗	0年11月	授業生	明治12年7月	明治13年5月	0年11月	2円	同左	山形県羽前国置賜郡上伊沢村住	
18	小林久平	2年0月	授業生	明治12年10月	明治14年9月	2年0月	1円33銭	同左	本県平民、巻村住	
19	大庭千吉	1年5月	授業生	明治13年1月	明治14年5月	1年5月	3円	同左	同上	
20	髙橋重太郎	0年6月	授業生	明治13年1月	明治13年6月	0年6月	2円	同左	同上	
21	菅原庫次	0年11月	授業生	明治13年1月	明治13年11月	0年11月	1円	6円	本県士族、旧村松藩巻村住	4等訓導
22	田邉源三郎	2年7月	授業生	明治13年5月	明治15年11月	2年7月	1円	同左	本県平民、巻村住	
23	土田壽作	2年3月	授業生	明治13年7月	明治15年9月	2年3月	1円	同左	同上	
24	野沢忠次郎	2年1月	授業生	明治13年7月	明治15年7月	2年1月	1円	同左	同上	
25	升下巳之吉	1年5月	授業生	明治13年10月	明治15年2月	1年5月	1円	同左	同上	
26	松原心平	0年10月	授業生	明治14年3月	明治14年12月	0年10月	6円	同左	本県士族、峰岡村住	
27	清水重太	3年0月	授業生	明治14年1月	明治16年12月	3年0月	3円	同左	本県士族、旧村松藩巻村住	
28	倉嶋常周	0年7月	3等訓導兼校長	明治14年2月	明治14年8月	0年7月	10円	同左	本県士族、北蒲原郡新発田町住	
29	大庭多四郎	3年9月	授業生	明治15年2月	明治18年10月	3年9月	1円50銭	4円50銭	本県平民、巻村寄留	
30	髙宮重継	2年10月	3等訓導兼校長	明治15年2月	明治17年11月	2年10月	18円	19円	本県士族、北蒲原郡黒川村住	17年2等訓導
31	南須原源治	3年7月	授業生	明治15年9月	明治22年3月	6年7月	50銭	2円	本県平民、巻村住	
32	平岡藤松	3年7月	授業生	明治15年9月	明治19年4月	3年8月	50銭	2円	同上	
33	佐藤熊三郎	2年0月	授業生	明治15年9月	明治17年8月	2年0月	50銭	2円	同上	後與兵衛と改む
34	大庭千吉	0年11月	授業生	明治16年4月	明治17年2月	0年11月	5円	同左	再任	
35	齋藤万次郎	1年8月	4等訓導	明治16年3月	明治18年10月	1年8月	13円	同左	再任	
36	笛木平蔵	1年2月	授業生	明治16年9月	明治17年10月	1年2月	5円	同左	本県平民、巻村住	藤田と改姓
37	林ツネ	2年2月	4等訓導	明治16年9月	明治18年10月	2年2月	10円	同左	本県士族、巻村住	
38	上杉九十九	0年5月	授業生	明治16年12月	明治17年4月	0年5月	4円	同左	本県平民、巻村寄留	有田と改姓
39	坂下福太郎	1年7月	授業生	明治16年12月	明治18年6月	1年7月	2円	同左	本県平民、巻村住	
40	古寺定次	2年0月	授業生	明治16年10月	明治18年9月	2年0月	1円	同左	同上	
41	徳永六造	0年8月	授業生	明治17年11月	明治17年7月	0年8月	5円	同左	本県平民、田子鳴住	
42	髙橋軍藏	1年6月	4等訓導	明治17年2月	明治18年10月	1年9月	6円	同左	本県平民、峰岡村住	
43	岸野貞次	1年11月	授業生	明治17年5月	明治20年9月	3年5月	2円	同左	本県平民、巻村住	
44	本間文藏	0年9月	授業生	明治17年3月	明治17年11月	0年9月	5円	同左	本県平民、赤鎗村住	
45	古寺定太郎	1年11月	授業生	明治17年5月	明治21年5月	4年1月	2円	同左	本県平民、巻村住	
46	小泉嘉吉	0年11月	授業生	明治17年9月	明治18年7月	0年11月	4円	同左	本県士族、中蒲原郡村松町住	
47	林健次郎	1年2月	授業生	明治17年9月	明治18年10月	1年2月	4円	同左	本県士族、巻村住	
48	中野勇	1年8月	授業生	明治17年3月	明治18年10月	1年8月	6円	同左	福島県士族、信夫郡福島町住	
49	笛木升次郎	0年9月	授業生	明治18年7月	明治20年4月	1年10月	1円50銭	同左	本県平民、巻村住	
50	渡邉才一郎	0年9月	授業生	明治18年7月	明治20年4月	1年10月	1円	同左	本県士族、古志郡長岡町住	
51	井上幹二郎	1年5月	校長	明治17年11月	明治19年3月	1年5月	20円	同左	本県士族、巻村寄留	
52	坂下亀太郎	0年6月	授業生	明治17年12月	明治18年5月	0年6月	4円	同左	本県平民、巻村住	
53	大庭千吉	1年1月	授業生	明治17年12月	明治18年11月	1年1月	5円	同左	三任	
54	桑原松七	0年6月	授業生	明治18年10月	明治19年11月	1年2月	1円	同左	本県平民、巻村住	
55	中山武造	0年6月	授業生	明治18年10月	明治20年4月	1年7月	1円	同左	本県平民、巻町寄留	
56	鈴木慶二郎	0年6月	授業生	明治18年10月	明治19年9月	1年0月	1円	同左	本県平民、巻村住	
57	佐藤阪太郎	0年6月	授業生	明治18年10月	明治19年5月	0年8月	1円	同左	同上	
58	小林政五郎	0年1月	授業生	明治19年3月	明治20年9月	1年7月	1年50銭	同左	同上	井上正雄と改む
59	渡邉貞平	なし	授業生	明治20年4月	明治20年9月	0年6月	2円	同左	本県平民、巻町寄留	
60	久我小傳治	なし	3等訓導	明治19年6月	明治20年5月	1年0月	7円	9円	同上	正庸改名
備考	平野秀吉	なし	授業生	明治18年10月	明治20年4月	1年7月	2円	同左	同上	

注〔1〕平野秀吉は明治12年6月5日入学、明治19年3月26日卒業しているため、この間を修学期間と定めた。ちなみに6年10月修学したことになる。
引用文献　『學校沿革誌』巻尋常高等小学校。

表２．平野秀吉の修学期間と在籍校長・首席教員一覧

校長No.	氏名	修学期間〔1〕	資格	就任年月	退職年月	在職年数	俸給	備　考
1	萩原貞	なし	第2中孝区大1番小孝公立巻校教師	明治6年1月	明治7年12月	2年0月	3円	
2	萩原直枝	なし	同上	明治7年12月	明治10年6月	2年5月	4円	
3	萩原巻五郎	なし	同句読師	明治10年6月	明治12年4月	1年9月	1円	
4	萩原盤根	1年7月	第5中孝区西蒲原郡1小孝区公立巻校訓導補	明治12年4月	明治14年2月	1年9月	10円	
5	倉嶋常周	0年7月	同3等訓導兼校長	明治14年2月	明治14年8月	0年7月	10円	
6	萩原盤根	0年6月	同巻校訓導補	明治14年8月	明治15年2月	0年6月	10円	
7	髙宮重継	2年9月	同3等訓導兼校長	明治15年2月	明治17年11月	2年9月	19円	同17年2等訓導ニ任セラル
8	井上幹二郎	1年5月	公立巻小孝校長	明治17年11月	明治19年3月	1年5月	20円	
9	齋藤盤根	0年1月	同訓導兼孝校長〔2〕	明治19年3月	明治29年10月	10年5月	12円	

注〔1〕平野秀吉は明治12年6月5日入学、明治19年3月26日卒業しているため、この間を修学期間と定めた。ちなみに6年10月修学したことになる。
注〔2〕正式に校長になるのは明治19年6月である。
引用文献　『學校沿革誌』巻尋常高等小学校。

表３．平野秀吉の修学期間における小学生数の推移

調査年月	下等			上等			合計（名）	備　考
	男（名）	女（名）	小計（名）	男（名）	女（名）	小計（名）		
明治 6年12月	118	12	130	0	0	0	130	平野秀吉は明治6年6月5日誕生。
明治 7年12月	118	22	140	0	0	0	140	
明治 8年12月	86	22	108	5	0	5	113	
明治 9年12月	161	31	192	4	0	4	196	
明治10年12月	136	35	171	0	0	0	171	
明治11年12月	160	46	206	0	0	0	206	平野秀吉は明治12年6月5日入学。
明治12年12月	180	44	224	5	0	5	229	
明治13年12月	171	44	215	3	0	3	218	
明治14年12月	165	51	216	10	2	12	228	

調査年月	初等科			中等科			高等科			合計（名）	備　考
	男（名）	女（名）	小計（名）	男（名）	女（名）	小計（名）	男（名）	女（名）	小計（名）		
明治15年12月	130	42	172	30	10	40	15	4	19	231	明治15年、学制改正。
明治16年12月	240	101	341	53	6	59	0	0	0	400	
明治17年12月	219	92	311	56	18	74	13	0	13	398	平野秀吉は明治18年10月授業生開始。
明治18年12月	198	89	287	89	15	104	12	0	12	403	平野秀吉は明治19年3月26日卒業。
明治19年12月	116	33	149	69	18	87	10	0	10	246	平野秀吉は明治20年4月授業生終了。

調査年月	尋常科			備考
	男（名）	女（名）	合計（名）	
明治20年12月	140	36	176	明治20年、学制改正。

※平野秀吉は明治12年6月5日入学、明治19年3月26日卒業しているため、この間を修学期間と定めた。ちなみに6年10月修学したことになる。
引用文献　『學校沿革誌』巻尋常高等小学校。

表4．井上幹二郎の履歴

西暦（号年）	年齢	事　　項
1857年（安政４年）	1歳	9月8日、越後の国長岡字中島に生まれる。父は総平といい、長岡藩郷中間小頭なり。母を美枝といい、同藩中間小頭権内の長女なり。外祖権内は黙齋と号し文学有り書をよくす。謹厳の人なり。
1862年（文久２年）	6	6、7歳の頃より外祖権内に就き、『三字経』、『孝経』、四書の素読を受け、習字を学ぶ。
1868年（明治元年）	12	長岡は戊辰の戦乱後修学に由なく、戊辰の秋長岡支藩三根山藩士たる叔父、井上由章の許に行く。叔父由章は父総平の弟にして三根山候旗本より封候に列せらるる際、徴されて儒官となり、後に藩の会計吏務に当たる。12歳より14歳まで専ら家庭において叔父由章より四書五経、唐詩選、古文真宝等の素読を受ける。読書百遍義自ずから通ずとの叔父の意見により、前記書冊の如きは行く百回の温習素読をなしたるを知らず。特に論語詩経の如きは暗唱せしめらるるにいたれり。
1870　3	14	14歳の秋に至り始めて藩校（入徳館）に入る。叔父の懇到極めたる教育の恩により入校の初めより、3、4歳年長者の班に入る。藩校に入り大教授新保正與先生より蒙求、史記、左傳、漢書等の質問講義を受け、及び複文、仮名遣、習字を学ぶ。学問の傍ら、撃剣及び英兵式の小太鼓を学ぶ。撃剣は其好む所なり。
1872　5	16	16歳の当時は世態一変し、世の風潮は学問を以て身を立てるの望みなきに至り。叔父の勧めに従い、同年秋長岡に出て手漉き製紙業を学び4ケ月にして業を終え、帰って製紙並びに其販売をなせり。但しこの間と雖も夜間は学修を怠らざりし。
1874　7	18	8月、魚沼郡相川村において小学校創設に際し、聘せられて教員となり。同村長昌寺の庫裡おいて授業を開始せり。年俸4円なり。是より先き大小区の制を布かれ、魚沼郡（現北魚沼郡）中山村の素封家古田島清作第14大区小4区の副大区長に任ぜられ、附近14カ村の村政統轄を命せられたるも、吏務に経験なきを以て、父総平招かれて其任に当たり、古田島清作の名にてその事務を執れり。相川村はその管轄に属せり。故に招かれえて同校創設に当たることとなれり。この前後において本籍を長岡より中山村に移せり。此の相川校の聘に応ずる時を以て峰岡叔父の家を去り、実父の許に復帰せり。
1876　9	20	7月、師範学校に入らんがため相川校を辞す。付言　相川校辞職後、師範学校入学試験の時期までの4カ月間、蒲原郡曽根村新保先生の学舎に寄宿し多年の疑義を質し教えを受けた。11月、官立新潟師範学校に入学。
1877　10	21	1月、政費節減の為、官立新潟師範学校廃止される。是においてやむを得ず県立新潟師範学校に入ったが、間もなく官立師範学校廃止の際、在学の生徒は他の官立師範に欠員ある場合は現級に入学せしむと文部省布告ありしを以て、数日にして県立師範学校退学し、仙台に赴く。本校在学中校外に師を求め、漢籍を仙台の鴻儒黒沢翁（戊辰の役仙台藩における勤王派の志士）に、作文を堤誠齋に学ぶ。
1878　11	22	1月、復た政費節減の為官立宮城師範学校廃される。宮城師範学校の廃止せらるるや北海道開拓使庁より、在学中の生徒にして適当なる者を教員に招聘したし校長吉川泰次郎（後に郵船社長）に照会ありしに依り其招聘に応ずることとし、同志3名と共に防寒具の準備中、偶々新潟師範学校長より宮城師範学校長に「新潟県人にして廃校に遭遇せる生徒は現級に編入す、説諭帰県せしめられたし」照会ありしを以て、当時北海道に行くは現時の渡欧より至難の想いありしと郷国の懐かしさとに依り同志3名と共に帰り、新潟県立師範学校〔1〕に入れり。本校在学中は漢文、作文、数学は試験を受ける外、平素の授業を受けるに及ばずとの特待を得たり。11月、2学年試験と同時に卒業試験をも受けたとし同志数名と校長に要求し幾回も情を尽くして懇請したれども斯かる前例なしとして許容せられざりし。然るに同月末に至り突然2学年生は同時に卒業試験をも行う旨掲示せらる。同級20余人中幹外6名は卒業試験にも合格したり。11月、師範学校卒業の当日を以て、魚沼郡十日町校校長に嘱託せらる。蓋し在学中夙に同校の招聘を受けおれり。十日町校に赴任するや同校を以て、魚沼郡全郡の教育の源泉中枢たらしめんと期し、始めて演説会なるものを開き教育に関し又は忠孝道義に関する事柄をあまねく公衆を集めて数々講演をなし、以て町民の知識、向学の上進を図り、また家毎に説き、人を諭して其子弟を就学せしめ鋭意学事の伸張に努め、幸いに全郡の諸校をして矜式する所あらしめたり。
1881　14	25	8月、北魚沼郡中山校校長に転任す。是れ郷里中山村の懇招に依れるなり。本校在職中私宅に揚州学舎を設け、校務の傍ら青年子弟に漢籍、作文、数学を教授せり。久門の子弟数10名に上りしも名をなしたる程の者なく、唯前記の堀口九萬一〔2〕なるのみ。
1883　16	27	文部省より教育上功労少なからずとして康熙字典、硯函を賞賜せらる。是れ文部省が教員を褒賞したる初めなり。故に、当時に在っては、世人頗る之を栄とせり。
1884　17	28	11月、西蒲原郡巻町の聘に応じ、巻小学校長に転任す。月俸25円〔3〕県下にあっては唯一の最高給たり。
1886　19	30	3月、西蒲原郡書記に転任し教育事務に当たれり。是れ幹二郎が官吏となれる初めなり。

引用文献
古田島吉輝『「父、井上幹二郎の履歴」井上正幹著より』2017,3p。

注〔1〕正式には新潟学校師範学科〔巻町『巻町史　通史編　下巻』巻町,1994,p.55〕。

注〔2〕1865（慶応元）年1月28日、長岡藩士堀口良次右衛門、千代の長男として生まれた。1883（明治16）年、長岡中学校に入学後、新潟師範学校に移り、同じ年岡野町校の訓導になった。1885（明治18）年9月には司法省法学校に合格している。1893（明治26）年、東京帝国大学法科を卒業し、翌年外交官試験に合格、仁川領事官補として朝鮮に赴任した。1895（明治28）年、朝鮮王妃暗殺事件に連座して一時入獄した。その後、ブラジル、スウェーデン、メキシコなどに公使として駐在、ルーマニア公使を最後に1925（大正14）年に退職した。退官後は講演や文筆活動に取り組み、遺稿「長城詩稿」を残した。号、長城外史。1945（昭和20）年妙高高原村に疎開したが、10月31日、81歳で没した　〔荒木常能『越佐書画名鑑第2版』新潟県美術商組合,2003,p.203〕。

注〔3〕巻尋常高等小学校『學校沿革誌』によれば、20円と記されている。

表５．平野秀吉が学んだ小学校の所在と変遷

平野秀吉	『新巻村史話』による巻小学校	『學校沿革誌』[10]による巻小学校
1873（明治6）年6月5日、西蒲原郡巻村290番地戸に平野兵吉長男として生まれる。	「1873（明治6）年1月、巻小学校が開校（略）。同年6月、萩原貞左衛門一家は巻村有志が新築してくれたであろう新居へ引き移ります。新居の位置は、旧巻御蔵所辺の一角（甲653番地）です。」[1]。「1837（明治6）年1月、開校した巻小学校は、代官所跡と道路（西裏[2]通り）を挟んだ真向かいの旧巻町会所を仮校舎として利用し、さらに、その後、南須原家を借りて移っています。」[3]	「明治六年一月第三大区小二区三番組巻村第二八九番地ニ開校ス（巻村字本町通リ二番町町會所東西拾間南北三間半ヲ以テ假校舎充ツ）」「明治六年十月ニ至リ就學生漸々増加シ加フルニ教場ノ制法及ヒ管理上ノ不都合ヲ来タセシヲ以テ仝村戸長南須原齋氏宅ノ一部ヲ借リ受ケ校舎ニ充ツ」
	「1875（明治8）年5月、巻警察所が設置されます。1876（明治9）年12月13日、巻警察所は第二号出張所と改称されます。（略）第二号出張所の位置は旧巻代官所のあった場所です。」[4]。「1876（明治9）年中に、上下の巻代官所の家屋は、取り壊されて、建坪70坪・庇廻り24坪余の警察所の家屋が新築されたのでしょう。」[5]。	
		「明治十一年四月仝氏宅地内ニ東西十四間南北七間半ノ校舎ヲ建築ス別紙図面第一号(図１)如シ」
1879（明治12）年6月5日、巻小学校入学（数え年7歳）。		
	「1883（明治16）年、巻小学校は巻代官所跡地に新築移転してきます。以後、巻代官所跡地を核として学校敷地を周辺に拡大していきます。巻南小学校に移転するまで続きます。現在の巻文化会館の正門玄関付近周辺が巻代官所の中心地でしょうか。」[6]。「1884（明治17）年までに巻警察署[7]が他所へ移転して空き地となりました。」[8]。	「明治十六年四月ニ至リ就孝生益々増加シ校舎狭隘ヲ告ゲ教育上不便ヲ感スルノ甚ダシキノ故ヲ以テ新タニ地ヲ仝村百六番地ニトシ東西五間南北十五間ノ校舎ヲ建設ス別紙図面第二号(図２)ノ如シ」「明治十七年九月ニ至リ校舎ノ狭隘ヲ感ジ本舎ノ西ニ更ラニ東西三間半南北十二間ノ校舎ヲ増設ス即チ別紙図面第三号ノ如シ」
1885（明治18）年10月、巻小学校授業生[9]（数え年13歳）。		
1886（明治19）年3月26日、巻小学校卒業（数え年14歳）。		
1887（明治20）年4月まで、巻小学校に勤務（数え年15歳）。その後、西蒲原郡国上村国上小学校授業生。		「明治廿年四月ニ至リ學制ノ変更ノ為メニ生徒著シク減員シ且ツ郡立高等小學校ノ設置アリシヲ以テ校舎ノ半部ヲ高等科西蒲原郡小學校ニ貸與ス此間校舎ノ南方ニ南北廿四間東西七間ノ体操場ヲ建設ス」

注）著者罫線引。

引用文献・注釈

〔1〕亀井功『新巻村史話』亀井功,2012,pp.132-135。
〔2〕「裏」は「浦」の誤り。
〔3〕亀井功『新巻村史話』亀井功,2012,p.135。
〔4〕亀井功『新巻村史話』亀井功,2012,p.132。
〔5〕亀井功『新巻村史話』亀井功,2012,p.135。
〔6〕亀井功『新巻村史話』亀井功,2012,p.136。
〔7〕「署」は「所」の誤り。
〔8〕亀井功『新巻村史話』亀井功,2012,pp.135-136。
〔9〕授業生とは、「正規の教員ではな」く「正規の教員である訓導の指示に従って訓導の授業を助けるアシスタント」である〔宮川秀一『明治前期の小学教員－とくに補助員・授業生について』大手前女子大学論集19,1985,p.140〕。
〔10〕『學校沿革誌』巻尋常高等小学校。